

## 「第30巻記念特集」によせて

柿 本 因 子

昭和47（1972）年3月、第1期生の卒業を機に、幼児教育科の教員・学生・卒業生を中心に「比治山大学短期大学部幼児教育研究会（比治山女子短期大学幼児教育研究会）」が組織され、同年9月、会員の研究成果の発表の場として、また本学幼児教育科の研究と教育の充実・飛躍を願って、研究誌第1巻を創刊した。爾後、研究のみならず、会員相互の情報交換・親睦等のための機関誌としての役割をも担い、本年で創刊30周年を迎え、ここに「第30巻記念特集」の刊行に至ったことは、望外の喜びである。

本誌は、編集の任に当たられた初代主任教授太田司朗先生により、「和顔愛語」と銘名された。題字は初代学長国信玉三先生の揮毫によるものである。太田先生は、「『和顔愛語』は大無量寿経の四十八願から拝借した聖句である。この聖句は仏典の中では深い意味を持つものであるが、その文字の表面的な意味をとっても、保育者として守るべき言葉として適当なものが示しているのではあるまいか。」と書いておられる。先生は創刊号の編集後記に、研究誌「和顔愛語」の誕生は、「初児が産まれて来る時の喜びと同じです。」と述べられ、心から喜ばれていたことが、今も忘れられない。先生はその後11年間、幼児教育科の運営と充実・発展に専念され、そのおかげをもって創立10年にして、本学幼児教育科の動向は、広く社会から注目されることとなった。

現在、我が国では今世紀を展望した教育のあり方を模索して、教育改革が進められている。物的生活水準は向上したが、精神面がこれに追いつかず、「こころの教育」が課題となっている。今こそ、四半世紀前に時代を先取りしていた本科の普遍性をおもひみるべきである。爾来、本学幼児教育科は「和顔愛語」を実践する保育者の育成を目的として歩みつづけ、その精神は今日まで継承されているのである。

最近、私は『21世紀への手紙—ポストカプセル328万通のはるかな旅—』（文芸春秋社刊）を読む機会を得た。昭和60（1985）年茨城県つくば市で開かれた国際科学技術博覧会（つくば科学万博）において、21世紀の未来の自分（家族・友人等）へ宛てて手紙を出す、ポストカプセル郵便の催しが行われた。手紙は筑波学園郵便局にある保管庫に大切に保管され、新世紀2001年元旦、一斉に配達された。その後、2月に郵政事業庁が実施したポストカプセル郵便コンクールの入選作の中から半分を選び、その取材をもつけ加えて、この本が出版された。第1部《手紙の部》は、わが子の未来を案ずる親の思いを綴ったもの、わが子や孫に、どんな人間になってほしいかを伝えたもの等、第2部《メッセージ部》は、手紙によって生きる力を得たもの、悲しみつつも強い愛情に心うたれ、相手への思いが深まったもの、人間関係の大切さを確認したもの、この企画の素晴らしさに感動し、生活の中に実現しているもの等で構成されている。

私は、涙なくしてこの本を読み終えることができなかった。16年の歳月の重みを感じ、胸が熱くなるほどの共感を覚えた。真情のこもった言葉の力が如何に大きいものであるかを、再認識させられたのである。ここにあるのは、まさに菩薩様が衆生に優しいお言葉をおかけになるという「愛語」の精神そのものではないだろうか。

さて、本誌全29巻を今回改めて通読させていただいたが、読み進むにつれ、「21世紀の手紙」に相通ずるものを感じた。なかでも、2代目主任教授内海巖先生が1巻から14巻まで掲載された諸論文は、幼児教育をさまざまな視点から捉えていて、幼児教育の将来を考えると、私たちは、常にここに立ち返らねばならぬとの思いを新たにした。

この四半世紀、教育環境は目まぐるしい変化を遂げてきた。しかし、30年という年月を経ても、本誌「和顔愛語」の精神は色褪せぬばかりか、本学幼児教育科の指針を示しつづけていることを誇りに思う。そして、先達の築かれたこのよき伝統を継承し、一層の本誌の充実・発展を期したいと思うのである。

最後に、これまでご尽力いただいた諸先生方に深甚の敬意を表するとともに、衷心よりお礼申しあげる。今後とも、更なるご指導、ご鞭撻を賜りますよう、念願してやまない。

(教授)